

私の秘密

私はなぜへいま・ここにいないのか

中島義道

nakajima yoshimichi



「私」の秘密



講談社学術文庫

中島義道（なかじま よしみち）

1946年生まれ。東京大学法学部卒業。同大学院哲学専攻修士課程修了。ウィーン大学で哲学博士号取得。電気通信大学教授を経て、現在は哲学塾主宰。専攻は時間論、自我論、コミュニケーション論。著書に『哲学の教科書』『「時間」を哲学する』『ウィーン愛憎』『差別感情の哲学』『「純粹理性批判」を噛み砕く』『哲学塾授業』ほか多数。



定価はカバーに表示してあります。

^{わたし} ^{ひみつ}
「私」の秘密
^{わたし}
私はなぜ〈いま・ここ〉にいないのか
^{なかじまよしみち}
中島義道

2012年9月10日 第1刷発行

発行者 鈴木 哲

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395-3512

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

装 幀 蟹江征治

印 刷 豊国印刷株式会社

製 本 株式会社国宝社

本文データ制作 講談社デジタル製作部

© Yoshimichi Nakajima 2012 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。なお、この本についてのお問い合わせは学術図書第一出版部学術文庫宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。[R]（日本複製権センター委託出版物）

ISBN978-4-06-292129-9

目次

「私」の秘密

まえがき	3
第一章 「私とは何か」という問いの特殊性	13
第二章 知覚の現場に私はいない	29
第三章 見えるものと見えさせるもの	53
第四章 想起とその主体としての私	73
第五章 観念に対する者としての私	108

第六章 「この」身体から「私の」身体への転換	134
第七章 他者たちの成立	160
第八章 不在としての私	176
エピローグ 私の死	198
原本あとがき	202
学術文庫版あとがき	204

「私」の秘密

私はなぜ〈いま・ここ〉にいないのか

中島義道

講談社学術文庫

まえがき

「私」は、なぜへいま・ここ」にいないのか？へここ」にあるのは、私の身体であり、私の心ではない。身体の「なか」をいくら探しても私の心は見つからない。また、私の心はへいま」あるわけではない。へいま」あるのは、ただ肩の凝りとか湧き上がる怒りとか^{たと}譬えようもないほどの悲しみであつて、これらの心理学の対象と別に「私」というものがあるわけではありません。こうして、古来（とくにデカルト以降）、哲学者たちは、へいま・ここ」にある私の身体とへいま・ここ」にない私の心との関係について頭を悩ませ、一つの答えをひねり出しました。それは、私の心はへいま・ここ」にないのだから、永遠不滅のものに違いない、という解答です。

あるいはそうかもしれないけれど、そう一跳びに永遠に向かわなくても、目線を低くして、心がへいま・ここ」にない理由をしつかり見すえる必要があるのではないのでしょうか？そうすると、心は現在の事象のみならず、想起という仕方で過去の出来事に、予想という仕方で未来の出来事に、さらには想像という仕方で架空のものにも

関わる、ということがわかります。心は〈いま・ここ〉に限定されずに、過去、未来、空想的世界を縦横無尽に駆けめぐる。すなわち、そもそも「心」とは実体概念ではなく関係概念なのであって、よって〈いま・ここ〉に対象として見出すことができないのです。

また、おもしろいことに、〈いま・ここ〉に心を閉じ込めてしまうと、心は消えてしまう。われわれが「知覚」と呼んでいるものは、(大きな幅の)〈いま〉に呼応していて、眼前のものをAとして、Bとして、知覚していることであり、すでに言葉による判断であり、ということはすでに再認であって、過去が入ってきている。厳密な刺激Ⅱ知覚の現場では、サッカーのボールを夢中で追いかけているとか、懸命にピアノを弾いているというように、かえって心(すなわち私)は消えてしまうのです。

それどころか、こうした身体的行為状況でなくとも、純粹に知的状況、例えば熱中して読書している場合でも、心(すなわち私)は消えてしまう。そして、ふと字が読みにくくなり、部屋が暗くなったことに気づき「われに返る」というわけです。そして、まったく逆に、私はまるで意識がないときの状態をも自分に帰属させて「私は熟睡していた」とか「私は失神していた」と語ります。

まさに私の心とは〈いま・ここ〉にないものの、つまり不在のものとの「関係」なの

であり、この関係はへいま・ここへを超え出るものですから、それ自身へいま・ここへに見いだすことはできないのです。

目次

「私」の秘密

まえがき	3
第一章 「私とは何か」という問いの特殊性	13
第二章 知覚の現場に私はいない	29
第三章 見えるものと見えさせるもの	53
第四章 想起とその主体としての私	73
第五章 観念に対する者としての私	108

第六章 「この」身体から「私の」身体への転換	134
第七章 他者たちの成立	160
第八章 不在としての私	176
エピローグ 私の死	198
原本あとがき	202
学術文庫版あとがき	204

「私」の秘密

私はなぜ〈いま・ここ〉にいないのか